

ハイデルベルク信仰問答講解説教 28 「キリストと一つに」(2012年3月11日 礼拝説教)

【聖書箇所】

「わたしは、イスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えるがよい。『あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる』と。」夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。」(出エジプト 16 : 12-15)

イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」(ヨハネ 6 : 53-58)

【説教】

さて、今日の信仰問答から今度は聖餐のことが取り上げられています。この聖餐についても日本基督教団では大きな問題を抱えています。それは未受洗者の陪餐の問題です。洗礼を受けていなくても礼拝に出席した人全員に聖餐のパンとぶどう酒を与えるのです。これは信仰的、神学的に明らかに間違っていることでして、しかも教団の規定にも立派に違反しています。それでこれを公然と行っていた教師、この方は教団の役員を務めている方でしたが、彼に教団は戒規を執行しました。直ちに止めるように戒告したのです。ところがその教師は全く改めません。それどころか戒規を執行した教団を相手取りその戒規の取り消しを求めて裁判を起こしている始末であります。教会法で対応していることにこの世の司法で訴えていることがすでに違う土俵で戦っているような印象を与えますが非常に混沌とした状況があります。問題なのはその教師と同じように未受洗者陪餐を行っている教職が結構いるのです。そういう立場の人たちが応援し、また中間的な立場もあって、なかなか問題が解決しませんでした。どうしてこういう問題が起こるのでしょうか。それは一言で洗礼や聖餐に対する無知です。教理的な未成熟と言ってもよいでしょう。その意味を知らないで、ただ慣習的に聖礼典を行っているから、こういう間違いを起こしてしまうのです。中身が無くなり形式化しているのです。

こういう問題を説教で触れるべきか迷いがありました。身内の恥をさらすようですが、でも皆さんにはこういう問題があることも知っておいてほしいと思います。これは憂うべき問題です。無知では済まされない。わたくしは、教団はもっと毅然とした態度で臨むべきであると思いますし、ここを放置するならば教団の教会としての質は低下していくでしょう。この聖礼典を守れるかが、教会であるか否かを分けるのです。

何より、この信仰問答において、洗礼のことを取り上げた後に、聖餐に関する問答を置いているところに自然な流れがあります。つまり聖餐は洗礼を前提とするということです。未受洗者陪餐を容認する立場の人たちは、この洗礼から聖餐という流れを逆転させてしまいます。先に聖餐に与ることによって、それが伝道になって、やがて洗礼に至ることもあるというのです。しかしそれは全く聖餐の意味が分かっていないからそういう逆転が平気できると言わざるを得ません。信仰の伴わない聖餐は、聖餐を無内容化し、形式化します。そこではただのパンとぶどう酒を食べたにすぎません。そこに感謝はあるでしょうか。あるいは場合によっては何かありがたい不老不死の薬のように迷信的にそれを受け取ってしまうこともあるでしょう。果たし

てそこに正しい信仰が芽生え洗礼へ至るのでしょうか。これは詭弁でしかありません。

普段の食事でも、ただ腹を満たすだけの食事であれば、そこには感謝は起こらない。ただ日常的に食べることを繰り返すだけかもしれません。けれども、その一回の食事に、これを与えてくださる神さま、手間ひまをかけてそれを作る人の思い、愛情を感じつついただくのであれば、そこには感謝が生まれ、一食一食が大切な食事になります。聖餐にもそこに込められた神さまの深い御旨がある。そこが分かって初めて聖餐は聖餐となるのです。聖餐の食事に意味を与えるのは洗礼の恵みです。

はっきり申し上げて、洗礼という器がなければ聖餐のパンとぶどう酒は無駄にこぼれるだけです。洗礼を受けることによって、初めて聖餐を受ける意味が与えられるのです。なぜなら洗礼はキリストに結ばれることであり、聖餐はそのキリストに結ばれていることを確かめる食事だからです。それはキリストと一つであること、それゆえにキリストのすべての恵み、それは十字架の犠牲による罪の赦しと永遠の命でありますが、わたしたちがキリストに結ばれて、今まさにそれに与っていることをそこで思い起こし確信する、そういう特別な食事なのです。

すでに信仰問答では問70の洗礼のところで、洗礼が「キリストの一部分として聖別される」ことだと言っています。そこにはキリストと一つになり、罪の古い自分が死に、キリストによる新しい命に生かされる恵みが示されています。そのことを聖餐もまた示しているのです。

問75で「思い起こし」また「確信させられる」とあります。ここでもこれが単なるパンとぶどう酒ではないことが分かります。それをいただくことによってキリストに結ばれている恵みを思い起こし、想起して、その救いを確信させられるのです。「思い起こす」というのは、主イエスが最後の晩餐の時に「わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ 22 : 19)と言われた「記念」ということです。これは特別な言葉でして、ただ覚えている、記念するということより、その出来事がよみがえってくる。そしてそれを追体験するという意味です。わたしたちは聖餐に与ることによって、キリストの救いの出来事をここで追体験し、まさに自分自身の身に起こったこととして受け止めるのです。「わたしのために」という言葉が繰り返されます。それは他人事ではない。また遠い過去の話でもない。今を生きるわたしと深いつながりをもっている。聖餐はそのようにキリストとわたしが今結びついていること、ゆえにそのすべての恵みに与っていることを思い起こして、なお信仰を強めるの

です。

問75では「確実である」という言葉も繰り返されます。キリストの救いは目で見て、舌で味わう。それほど確かなのです。宗教改革者はこの「見る」ということを重視しました。聖礼典を「見える神の言葉」というほどであります。それほどに神さまの救いは現実のものなのです。わたしたちは弱く、時に疑い、確信が持てなくなるときがある。時に信仰などは空想の域を脱しないという思いさえ生まれてくる。それはわたしたちの何の助けにもならない。特に試練にあると、わたしたちは信仰の力を疑うのです。

カルヴァンは、なぜこのようなしるし、礼典があるのかという問いに、「わたしたちの弱さのため」と答えています。聖餐はわたしたちの信仰を維持するために必要です。食事を摂らないと体は衰弱します。同じように聖餐に与らないと信仰も弱り、やせ細ってしまうでしょう。聖餐はキリストの恵みを思い起こさせて、わたしたちがいつまでも信仰を保つことができるように、神さまが与えてくださった恵みの手段なのです。キリストにこそわたしたちを根底から支える命がある。それは十字架と復活において成し遂げてくださった「罪の赦し」と「永遠の命」です。これは神さまから罪を赦されて、神さまの子として、神さまと正しい関係に生きることです。キリストに結ばれて、わたしたちは神さまの子とされるのです。そこに罪に支配されていたわたしたちの回復があり、新しい命がある。それがわたしを支えている。

今日読みましたヨハネ福音書に「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない」(6:53)とありました。主イエスがその存在をすべて注ぎ込んで、わたしたちに命を与えてくださる。このキリストの中にわたしたちが生きてべき本当の命があるのです。キリストの命とわたしの命が一つになる。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」(6:56)このようにわたしの存在がキリストと一つであることを聖餐は示しています。問76はそのことをはっきりと言い表しています。

聖餐に与る時に、わたしたちがそこで心に留めたいことは、何より自分の存在がキリストに結ばれて一つにされていることです。天と地を貫いて、世界の中に自分の存在がポツンと置かれているのではない。ひとりぼっちではない。「この方の肉の肉、骨の骨となり」とあります。これは創世記の創造物語でアダムにエバが与えられた時に、アダムが「ついにこれこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」(創世記2:23)と言ったことを思い起こさせます。結婚式でもそこを読みますが、それが愛することなのです。相手の存在と自分が別々ではない。一心同体なのです。神さまはそうにわたしたちを愛しておられる。骨の骨、肉の肉としてキリストによって一つとなってくくださるのです。キリストの中に罪の悲惨に寄り添う十字架があり、またそこからあがない出す復活の命があります。そこにすべてがある。そこにわたしたちは聖霊によって結ばれるのです。神さまの愛がそうにわたしの存在を捕らえています。

そしてそれだけではない。キリストと一つになるだけでなく、このキリストを通して、わたしたちも一つになる。骨の骨、肉の肉として、互いに愛し合うことができる。もっと分かり合うことができる。震災から一年。改めてその悲しみ、嘆きに寄り添い続けることの大切さを考えます。どのように関わり、寄り添うことができるのか。目に見える形で、ボランティアに行く。募金をする。それも大切な関わりでしょう。それができる環境にある人は進んでほしい。教会もそういう関わりを続けています。でもその中で忘れてはならないのは、この悲しみや嘆きの中に誰よりも深く寄り添っておられるのはイエス・キリストであるということ。十字架の主がそこに一番近くにおられるのです。そのキリストにわたしたちも結ばれているなら、このキリストにあってわたしたちは一つであることを確信するのです。キリストの中で人の悲しみや痛みを寄り添うのです。

今、教会は受難節にあります。キリストの御受難を覚えることは、同時に、そこでキリストが担われている罪の悲惨、死の悲惨、そこに苦しむ人に深く共感していくことでもあります。わたしたちはそのようにキリストを通してもっと人の悲しみや痛みを分かち合うことができる、そういう人間へと回復されていくことが大切であります。祈りをささげましょう。